

# 狩野興以に関する基礎研究

大阪芸術大学 工芸学科 教授 五十嵐 公一

狩野興以(～1636)は江戸時代初期に活躍した絵師である。狩野家の弟子筋の絵師だが、狩野一門に多大な貢献をしたため狩野姓を許されたと見られている。江戸時代の狩野一門繁栄の基礎を作ったのは狩野探幽、狩野尚信、狩野安信の三兄弟だが、幼い頃の彼らを指導したのは興以だったという記録もある(「三暁庵雑志」)。

その興以は当然ながら絵師として優れた技量をもっていた。そのことは現存作品から明らかであり、例えば狩野一門が総力を挙げてあつた寛永 3 年(1626)の二条城障壁画制作でも興以は重要な役割を担っている。興以は狩野一門、更には江戸絵画史を考える上での重要人物なのである。

その狩野興以について、これまで研究の基礎となってきたのは山根有三「狩野興以筆佐野渡図屏風について—興以画の編年に触れつつ—」(『国華』1235、1998 年)と同「狩野興以の法橋時代の画風について—名古屋城・二条城障壁画筆者の再検討を背景に—」(『国華』1264、2001 年)の二本の論文だった。これらは興以に関する文献史料を初めて網羅し、それらに基づいて作品を考えた着実な研究である。そのため興以について論じようとする研究者は、必ずこの山根論文を出発点としてきた。

その山根論文では、興以の法橋叙任の年を寛永 2 年(1625)だと考えている。『御湯殿上日記』寛永 2 年 10 月 21 日条に「ゑかきのかの(絵かきの狩野)」が新たに「ほつきよう(法橋)」になったという記録がある。これが狩野興以の法橋叙任時の記録だと考えたからである。

ところが二条康道の日記『康道公記』の寛永 12 年(1635)11 月 1 日条に、「画師興以法橋小折紙持来」という記録があることに私は偶然気づいた。この頃の二条康道は摂政を務めており、その康道の周辺で興以が法橋となるための手続きが進んでいたことが分かるのである。ということは、興以が法橋となったのは寛永 12 年 11 月頃ということになる。山根氏が注目した『御湯殿上日記』の記録からは寛永 2 年に狩野派のある絵師が法橋になったことが分かるのだが、それが興以であったとは確定できない。興以が法橋となったのは、寛永 12 年 11 月頃だったわけである。

そうすると、興以について多くのことを考え直さなければならなくなる。それまで考えられていたよりも 10 年も法橋叙任時期が遅かったことが明らかとなったからである。この事実から多くの問題が派生する。

例えば、興以は寛永 13 年(1636)7 月 17 日に亡くなっ

ている。これは東京都港区の種徳寺にある興以の墓石から分かるのだが、そうすると興以が法橋として作画した時期は 1 年程でしかなかったということになる。興以作品の中には「法橋」(朱文火燈窓形印)が捺されているものが複数ある。福井県立美術館所蔵の「韃靼人狩獵図屏風」など私が把握できているだけでも 7 点の作品がある。これらの作品は興以が法橋になって以降のものだと考えられるから、興以が亡くなる 1 年程の間に描いたものということになる。

また、興以が亡くなるまでの1年程の間に描いた作品群が分かったことにより、興以の画業が更に具体的に分かるようになる。興以作品で制作年代が分かっているものとしては、元和 2 年(1616)の等持院方丈障壁画、寛永 3 年(1626)の二条城障壁画、寛永 4 年(1627)以前に描かれた熨斗家本当麻寺縁起絵巻、寛永 11 年(1634)の名古屋城上洛御殿障壁画などが知られている。それらの作品と興以が亡くなるまでの1年程の間に描いた法橋時代の作品を比較することにより、興以の画業はその終着点に向かってどの様に変化していったのかが具体的に把握できるようになる。

更に、『御湯殿上日記』寛永 2 年 10 月 21 日条の記録から、この頃に狩野派のある絵師が法橋になったことが分かる。これが興以ではないことが『康道公記』から分かったことにより、興以以外の絵師がこの時に法橋になっているという新たな事実が明らかとなった。そこで、この頃の狩野一門の絵師たちを見渡した時、その候補者として浮かんでくるのが狩野甚之丞(1583～1628)である。この甚之丞については法橋になっていることが以前から知られていたのだが、その叙任時期までは分からなかった。興以が法橋となったのが寛永 12 年 11 月頃だと確定したことで、甚之丞の法橋叙任時期が寛永 2 年であることが明らかとなったわけである。

私はこれらの事実を「狩野興以の法橋叙任」という論文にまとめ、これを『国華』1518 号(2022 年 4 月)で発表した。しかし、興以の法橋叙任時期から分かる事実は、恐らくこれらに留まらない。そこでここから更に何が分かるのかについて探るための資料を集めた。その成果として少しずつ資料が集積しつつあるので、その成果を今後改めて別の論文として発表したいと考えている。

狩野興以の研究は、これからの進展が期待できそうだ。